

座 談 会



左から中嶋，斎藤，林の各氏

ベトナム内部の深刻な確執に、米・ソ・中など大国の思惑が複雑にからんで、“ポスト・ベトナム”には多くの難問が控えているようです。そこで、その分析を行なうとともに、日本の果たすべき役割りを語っていただきました。

# パリのベトナム平和国際会議をめぐって

出席者

日本経済新聞論説委員

東京外語大助教授

評論家

斎藤 志郎

中嶋 嶺雄

林 三郎

## 成果は大きく評価しているか

林 ベトナムを巡るパリ国際会議のお話をするのですが、まずこの会議の評価から始めたいと思います。パリの国際会議は、アメリカ、ハノイ、サイゴンの政府、それに臨時革命政府の

間で結ばれたパリ協定を、国際的に認めさせ、それを敷られないように監視するということだろうと思います。はたしてこの会議はそういう効果をあげたでしょうか。

齋藤 いろいろの見方があると思いますが、私の印象では問題は二つに分ける必要があります。ベトナム戦争を、国際紛争として見た場合、パリ国際保障会議は所期の目的を達成できなかったのではないか。なるべく武力



齋藤 志郎 氏

によらず、平和的に問題を処理することを当事国はもちろん、主要な国が認め、その国際監視は実行には問題があるとしても、機構が一応形としてできたのですから、一つの決着がついたと言えるでしょう。

しかし、他面ベトナム内戦というものが本当に終わり、インドシナ半島の平和が、これのできるのかどうか。これにはこの会議の影響力はほとんどない。むしろベトナム人自身の問題だということとは当然でしょう。

軍事紛争の解決から政治的将来、経済建設問題まで、パリ保障協定の領域を越えたものだと考えます。

中嶋 私は会議としては確かに成功したと思いません。当初の予想より米・中・ソの三大国が、意外にすんなりと合意に至ったわけですから。とにかく戦争が非常に長期にわたって、和平がはい出されてからも、数年に

なるのですから、国際会議の場で大国が自己の利害をむきだしにして主張しあうのは、非常に不利だという読みがあったらどう思うか、と思いますね。

ではベトナムを巡る米・中・ソを中心とする外国の利害が、完全に調整されたかというところではない。そこに今後の問題が出てくると思います。またこうして戦争はとにかく停戦にこぎつけたんですが、この戦争をもたらしした根本的な要因については、何ら決着がついていないのですね。そこに今後の大きな問題があると思えます。

それから三番目に、非常に印象的なことは、国連が非常に無力であることをあからさまに見せつけられたことです。国連の事務当局

はワルトハイム総長以下、初期の段階で非常にハッスルしており、何か主要な役割りを演じるのではないかと、いう期待もあったようですが、それが完全に挫折しましたね。これで第二次大戦後の主要な国際紛争は、ほとんどすべて国連の外で決着が下されたという結果を残しました。今後この問題をどう考えていけばいいのか。大きな課題が提起されていると思えます。

一方、従来国連を全面的に拒否していた中国が、自ら国連内で特権を持つ側になり、逆に国連を重視してきているわけです。これらについてのご意見を伺いたいと思っております。

林 アメリカがハノイとともに締結したパリ協定を、ソ連、中国に一応認め

させ、これを保障者の立場に立たせたことはアメリカの成功だったと思います。が、ただ保障者となった中ソが有効に動いて、本当に保障してくれるかどうか。これは今後の三極構造で、アメリカが中ソをどうあやつるかというところに、かかってくるんじゃないだろうかと思えます。

もう一つの問題点は、カナダの主張していたように、国際監視機関があまりに十分に機能しないことと、国際会議の常設機関ができなかったことですね。あと再調節するとか、いろいろの道は残されましたが、これも一つの問題点だろうと思えます。

斎藤　パリ協定を、国際条約というのは問題で正式にはアクトといつて世界政

治の歴史の中でも、ユニークな性格を持っていると思うのですが、この基本的な性格を考えますと、これはニクソンの訪中、訪ソが背景であつて、ベトナムでまがりなりにも大國間の妥協ができたのです。

いま昔流のイデオロギー闘争時代は終わったといいますが、しかし実際にはアメリカ、中国、ソ連のそれぞれの方々は妥協しておらず、社会体制、政治信条を異にする国は、今後ますます自己を主張して、そこにイデオロギー上の妥協はしないでしょう。これはベトナム局面でも同じです。もちろん武力介入による自分のイデオロギーの貫徹はしないでしようが、一応それぞれの勢力の共存を認めるという形で決着した

だけで、一種の暫定協定という程度のものでしよう。それがパリアクトの基本的な性格と考えていいと思うのです。

ですから当のベトナムや、カンボジアにおいても、北は北のイデオロギーを全然変えません。南ベトナム

## 意外に強いチユー政権の基盤

は二つか三つの勢力があつてこれから体制をつくっていくわけです。だから一つの政治的主体制を求めて、力ではなく平和的手段で、これら勢力の共存をどうやって見いだしていくかに、問題はかかっていると思えます。

中嶋　インドシナ半島の問題がまさにパリで国際会議として、保障されたというところに象徴されるように、この問題はある意味で国際的な内戦だったわけですから。しかもその背景にいた米・中・ソ三大國がそれぞれの利害を持つので、そこでは妥協的に共存する以外になかったのですね。

これはハノイの立場から

すれば、かなり巧みな外交を展開したんじゃないかと思えます。ベトナムをめぐって中ソ対立はものすごく深刻だったのに、ハノイはこれを一定のところで歯止めをしながら、自己に有利な方向に持っていき、同時にアメリカとの関係では、キッシンジャーのハノイ訪問のときの経済合同委員会設置のような、かなり現実

主義的な方向を示しました。だからハノイ自身が、かなり大國間の均衡のバランスをうまくとりながら持っていたので、共存関係が出てこざるを得なかったという気がするんですね。

しかし、当のインドシナ半島、あるいはベトナムそのものは、まだまだ将来が予測できない状況ですね。ですから、アジア、あるいはベトナムに緊張緩和が訪れるという見方は、非常に短絡的であろうと思います。

そもそも緊張緩和の要件としては平和共存とか、ステータスクオとか、あるいは社会的安定度という問題がありますが、ある意味で外からのイデオロギー的な働きかけや、社会的な不安定要因が、一応凍結される

状況の中で、初めて緊張緩和が実現されるものですね。ヨーロッパはまさにそうですが、アジアでは非常に条件が違います。今後のベトナム、特に南の二つの勢力が、問題をどう処理していくかにかかってくると思います。

ついでに私の予測を申し上げますと、ハノイは意外に今後ともかなり現実的な対応をするのではないかという気がします。特に中ソ対立をひかえており、これはハノイにとってもかなり深刻な問題です。そしてハノイは基本的には常に中国が恐いのです。ですからこれを考えて動くハノイとしては、できるだけその行動の余地をアメリカとの接触の中に求めていくでしょう。

それとまたハノイは、確

かにマルクス・レーニン主義には違いないのですが、基本的にはナショナルリズムであって、たとえば今日のソ連や、中国の毛沢東が志向しているほどの、イデオロギー的傾向はない。むしろアメリカなんかとの接触によって、ますますその方向にいく可能性があるとすれば、南に対しても、先のことはわかりませんが、かなり現実的に対応し、現状固定化の方向に出るんじゃないかという気がします。

ところで南のチュウ政権の基盤は意外に強いと思うのです。チュウ政権はいつ崩壊するかわからないといった印象が一般に与えられますが、この間三年ぶりでサイゴンにいきましたところ、そんなことはありません。いろいろな問題を持ち

ながらも、あの状況の中で本当によくやっています。その上民衆には一種のナショナルリズムあるいは主体性が出てきて、何のためにここまで北と戦ってきたのか、ここでチュウ政権を降しては何もならんという気持ちもあり、従来のチュウ政権のイメージと違っています。だから彼は一種のリアリティーをもち、強大な基盤を持ってきているという気がします。

中にはアメリカはもうあきらめているという観測もあります。私はそうではないと思います。だから南が解放戦線の側に一つになるということは、まだまだ無理ではないか。そうなるという将来には、朝鮮半島のような形で、現状固定化になるかもしれないが、そ

れまでにはいろいろ曲折がありましよう。その場合、基本的には問題の根は全然解決していかないということ

## 新しいナシヨナリズムの芽ばえ

林 パリ協定そのものがばくぜんとしていますね。統一をうたったり、南だけの自決といたりしていま

を見ながら、将来を展望しなければならぬでしょうね。

やないかという気がするのですがね。

斎藤 そうですね。あらゆる協定というのは、自分のほうに都合よく解釈できれば、それで成立する。しかし、お互いの思惑は非常に違っているのが、現実じ



林 三郎 氏

す。南で投票の結果、南だけの統一、独立となれば矛盾があるわけです。だから流動的な状態で、どっちへ転んでもあうような協定し

やないかと思えます。それを別としまして、いまの中嶋さんの予測に、私も大体同感です。南にはチュー政権と臨時革命政府ともう一

つ第三勢力がある。第三勢力は軍隊を持っていないから、主体的なものとは考えにくいんですが、ともかく現時点では日本政府などでは、政治的なバランスとしてはチュー政権が強いという判断があるようです。その裏付けになる材料は必ずしもはつきりしませんが、大まかな見方からして、そういえるのではないでしょう

か。初めチューがグエン・カオ・キと一緒に政権をとったのは一九六五年六月で、後にチュー一人になりましたが、できた当時は三カ月ももてばいいほうだという見方があった。それがずつと八年ばかり続いているわけですね。チュー政権はアメリカのかいらい的なものという非難はありますが、

とにかく軍隊をもっており、その組織によりまがりなりにも数年間存在してきたのです。これが一般民衆を代表するようにどう持つていくかは、体制内部の別の問題ですが、組織としては相当強いものがすでに存在しています。逆に解放戦線側は、いままで武力で固めるチャンスはあったのですが、今後武力は使いにくいということになると、政治的な力か、経済的な力しかありません。

政治的な力というのは、結局民衆の掌握その他いろいろありましようが、実際の局面での民心をつかむのは、具体的な利益ですね。そうでないと架空のものになります。これは、現在の解放戦線の組織では、なかなかむずかしいのではない

か。いろいろな政治担当局員など送り込んで工作しているようですが、それを定着させるには、やはり民衆の利益に具体的に答えていく実績を示す必要があると思うのです。

中嶋 私は昨年秋、ア  
ンロク近くで難民キャンプ  
を見ましたが、ものすごい  
数の、去年の四月の攻勢以  
来は、特に山岳民族を中心  
にした多数の難民がテント  
を張っていました。チュー  
政権にとって、あの難民を  
食べさせていくことは、そ  
れだけでも大へんです。し  
かしこれをやるのは、チュ  
ー政権しかないですね。  
あの難民はなぜサイゴンに  
逃げてきたか。かなり一七  
度線近くの山岳地帯からも  
逃げてきているはずで、北  
のほうに行くことも可能だ

つたろうし、解放戦線の地  
域もたくさんあるわけです  
から、そこに逃げることも  
できたでしょう。それなの  
にかなりの数がサイゴン政  
府を頼って逃げてきている  
のです。ベトナム人はもと  
も非常に賢明な民族で、  
その上長い戦いをしただけ  
に、ここでいまガタガタに  
なったら、何のために自分  
たちだけが犠牲になったか  
わからないという、一種の  
新しいナシヨナリズムとい  
うようなものが出てきてい  
るといえます。それはある  
場合には、アメリカに  
対する抵抗にもなったの  
かもしれないがね。

齋藤 第一次のジュネー  
ブ協定が五四年にできた  
ときから二十年近くたしまし  
た。この間に南北ベトナム  
とも社会構成が根本的にか

わったんではないでしょう  
か。第一次協定が守られな  
くて、その後南の内部に革  
命戦争が始まった時点で、  
ゲリラ、あるいは解放戦線  
は村落を拠点として解放運  
動を展開しました。戦乱の  
中でそういう村落に多数の  
難民が発生しています。一  
説では三百万といい、これ  
は少し多すぎるかもしれま  
せんが、それがサイゴン周  
辺に流れてきておるのがあ  
ると思いますね。

これをどうするかという  
ことは、選挙のときその票  
も考えないといけないし、  
戦後復興の第一の課題が難  
民救済ですし、今後のベト  
ナム動向を見る場合には、  
この大きな変化を見のがし  
てはいかんのじゃないかと  
思います。

林 しかし、かれらを救

うというのは、結局農村に  
送り出すよりしやうがない  
でしょう。

齋藤 それができればい  
いと思うのです。

林 それができないうでし  
よう。インフレを抑え、難  
民を救うということは、む  
ずかしい問題ですね。

齋藤 バングラデシュの  
ときも、相当大きな難民が  
出ました。それを国連を中  
心に、あるいは各国別に緊  
急の援助をやっています  
が、その先はやはり経済開  
発、経済再建が課題になっ  
ていますね。

林 しかし経済開発は、  
やはり農村を何とかしな  
きゃ、どうにもならないの  
じゃないでしょうか。

齋藤 ただ農村に送り帰  
すという方向は、もちろん  
あると思いますが、当面す

でに集まっている難民をどうするかが非常にさしせま

った問題ではないかと思えます。

## 見通しを誤った新聞の報道

林 一番さしせまった問題は、インフレだと思いますが、何しろサイゴン政府はほとんど何も公表しないで、ただよそから援助物資をもらって分けるぐらいしか、しようがないのですが、その点どうですかね。

中嶋 そうすると、こういう問題は、臨時革命政府のほうが解決の可能性があるというわけですか。

林 いや、可能性があるというのではなしに、チューーさんがその困難につけ込まれやしないかと思うのですよ。

中嶋 チュー大統領はそれだけの困難を背負って

るということで、三年前とはずいぶん違ってきているという感じを受けますね。

林 チューさんを甘くみたのは日本の新聞で、非常に見通し違いでしたね。チュー政権は六七年ごろにはつぶれてなきやいけないでしょう、日本の新聞によると。(笑)

斎藤 そうですね。私もはっきり記憶をしておりますが、「三カ月保つか」という見出しが最初に出ましたね。

林 テト攻撃も保ったし、あとずつと保ってるわけですからね。どうして日本の新聞はチュー政権の見

通しを、完全に誤ったのでしょうか。何か解放戦線びいき、ハノイびいきということでしょうか。

斎藤 日本のジャーナリスト全体のベトナム報道のあり方を考えてみると、一つの固定観念というようなものがハノイ、あるいは共産側に好意的であったし、アメリカあるいはチューと連合の側にも多少の原因があり、その二つが実像を狂わしてきたといえるのじゃないでしょうか。

これは私自身反省にもなりますが、日本の新聞に一番かけていたことは、民衆の対応あるいは民衆の現実の動きをよく見ることで、す。もちろんルポルターージュも相当報道されましたが、実際の民衆の立場でものを考えるという姿勢は、

あまりなかったんじゃないでしょうか。ベトナムの民衆に、政治意識というものが存在しないというなら、これはできないわけですがね。その辺がベトナム報道の一つの盲点ではなかったかという感じですよ。

中嶋 それはベトナムだけでなく、カンボジアについてもいえます。ロンノル政権の評価も非常に誤って、もっとひどかったわけです。シアヌークの復権は既定の事実であろうというふうなことでした。これは現地をよく見ればわかるのですが、シアヌークがブノンベンの青年層の間で、どう評価されていたか。クメール・ルージュとの関係はどうか。この関係は、そう一筋縄でいくものではありません。その点はむしろ

ソ連のほうがリアルに、自分の利益も含めてみていたと思うのです。

もう一つは、中国問題も含めてアジアの問題全般的にそうですが、いわば論理的な、特に主観的な論理だけでは、絶対にアジアはつかめないということです。

つまり実態をいかにリアルに掌握するかという認識力と、それを支えるフィールドワークということです。

新聞社の特派員は、実際には現地において、フィールドワークはやっておられるのですが、どうも、その辺にかなり問題があるのじゃないか。

実は私は新聞の報道についてかなりの責任はデスクにあると感じています。日本の新聞界では大学を出たばかりでまだ十分な認識力

もない人たちが、どんどん記事を書きます。それをデスクが同業他社との関係などを考えて、いろいろいる。その辺に新聞作成上の一つの大きな問題点があると思います。



中嶋 嶺 雄 氏

る日本のマスコミ全体の報道のしかたには、かなりいろいろな問題が出ており、ここから一つの教訓を引き出せるような気がします。しろうと考えかもしれませんが。

本当は、ある程度訓練を経た人たちが第一線で書くべきだと思いますが、この人たちは三十代の後半か四十代くらいになっていて、デスクにおさまるため、第一線を見ないようなことになる。そうしたことを含めて、最近、国際関係に關す

斎藤 私も

ある雑誌に頼まれて、国際報道の欠陥と書くことを書いたのですが、それは別として、いま

のお話の批判の対象になっているわけです。弁護することも多少はできますが、しかし反省することがまず必要です。

それはベトナム報道だけではなくて、日米のコミュニケーションションギャップというものなどもあります。た

とえばワシントンからの現地報道を本社で受けて、その先に読者がいるわけですが、そのパイプのところですでにコミュニケーションションギャップが存在しています。これは相当大的な問題なんです。しかしこれは新聞の罪というだけじゃ片付かない問題で、その欠陥は欠陥として認めた上で、新聞はそういう欠陥を持っているということを読者が判断した上で、国全体の世論をもう一回フィールドバックしてつくり上げていくこと以外にないんじゃないか。

新聞はハブニングを重視し、ニュース第一主義だとよくいわれますが、これは日本だけじゃなく、アメリカの新聞もそうで、ハブニングだけですと、それがす

べての真実に直接にはつながらないのではないか。そこに生じた現象の裏やその根に、起こるべき要因が潜在している。そこまでつっ込んで考えないと、本当の真実はつかめません。ハブニング重視の考え方よりも自分のオピニオンあるいは

## 日本のアジアへの認識不足

林　　パリ国際会議にもどりますと、ベトナム問題は本来はアジアの問題であるのに、米・中・ソがからんでくると世界的な問題となり、パリ会議に出席したアジアの国は非常に少なかった。日本などはもう少し役割を与えてほしかった。もっとも日本はベトナムに巻き込まれるなど、しきりに警告する人もいたし、そ

自分の見方とか見識を持って、問題にアプローチしていく。これは当然のことですが、ハブニング重視からオピニオン重視の方向に、国際報道の重点も移っていきなきやいかんのじゃないか。そんな印象をもっております。

の点、このパリ会議に招かれないのは、巻き込まれないですんだといえますが、(笑)これは喜ぶべきかどうか。アジアの国がもう少し呼ばれてもよかったですね。気がしますね。

齋藤　パリ会議の性格にもよるでしょう。外部勢力はなるべく介入せず、民族自決に任せるとい性格からすれば、アジアの問題

であるという意味では中国が出ているので、日本が顔を出す理由はなかったと思うのです。アメリカは最初日本招請を支持しているともいわれましたが、キッシンジャーの説明だと、全会一致の賛成がなかったといわれます。日本の現在の立場では、呼ばれもしないのに出てゆくことは、ちょっとできないでしょう。今後は、あるいは招請される機会も出てくるのではないかと思いますけどね。

中嶋　それに、いまのような国際関係に対する認識力で、日本が出ていったんでは、非常に危なっかしい点もあります。さっきのマスコミの問題もですが、政府にしても、もうちょっと国際情勢をリアルに分析して、それに対する手だてを

考えることが必要で、いわば常道主義だけで動いていたのでは、気がついていたら、日本はとんでもない不利な状況に陥ってしまっていたということにもなります。

最近中国を訪れたキッシンジャーの新しいコミュニケーションをみても、日本はお人好しで、いつもだし抜かれていくんじゃないか。国際関係は非常に流動的、多元的に動くのですから、それに対して知恵を働かせる素地をつくるのが、まず大切な気がします。

林　ベトナムの情勢そのものが、今後も流動的でしょうが、結局は三極構造の中と、もう一つは東南アジア全体の構造の中に組み込まれて、安定化の方向に行く可能性があるんじゃないでしょうか。

ドゴールがブノンベンの演説のとき、インドシナの中立化といわず、東南アジアの中立化といいましたね。あれはドゴールの大ぼらだと思っていました、いまになって考えると、東南アジア全体が中立化の方向に向かい、そこへインドシナをはめこむほうが、安定してきますね。そうなるような気がします。

その場合、日本の東南アジアへの認識はどうか。カイズ・ビーチが、日本人は「アメリカ人はアジア人を知らない」というが、日本人のほうが知らないんじゃないか、と書いてますね。

斎藤 これまでの日本人は、アジアを経済的に市場として認識しただけです。賠償からはじまって、経済協力という形で、たくさん

の日本人が行きました。しかし、それらは経済的利益の追求から、市場、あるいは原料資材の生産基地としてしか、認識してこなかったのじゃないでしょうか。そして、格差が非常に大きいので、すでに日本の経済進出のオーバーな、あるいはオーバーな経済コミットメントといっているかと思えます。このままでいきま

中嶋 お話には私も賛成で、特にドゴールの「東南アジアの中立化」というような言葉を考えると、すぐASEAN(東南アジア諸国連合)の問題が浮かんできます。ASEANはまだ基礎が弱いし、関連諸国それぞれの利害もいろいろから

## 東南アジアの中立への道

すと、急速にあつれきを起す。これからは、経済利益から少し高い次元に上って、政治的な判断を絶えず養っていく必要があるでしょう。政治的判断とは何かといえ、今後インドシナ半島も含めた東南アジアが、どういう方向に歩いていくかという、大勢的な見通しじゃないかと思えますね。

みあっていますが、日本が今後重視すべき対象だと思えますね。

かつての五〇年代にネーデルや周恩来がリードしたノンライアント・ポリシーは、いわば理想的な中立主義だと思うのですが、今日のASEAN諸国が志向し

ているのは、米・中・ソの犠牲になるのはごめんだ、第二のベトナムになりたくないということを含めて、もっと現実的な中立主義がいいと思っただけです。

その点をよく理解しておかないと、日本はアジアも中国も知らないで、経済的な風ほうだけが肥大し、拡大しているということ、大きな問題があるわけで、ある意味では国自体はまだまだ弱くてもろいのです。

これらアジア諸国のほうが国際情勢のしゅら場をリアルに見つめているのですから、日本がただ人の好い、観念的な対応をしたら大きな間違いで、かれらからも相手にされなくなるかもしれない気がします。

斎藤 東南アジアの一つの政治的中立化とは、経済

的中立ということではありませんが、経済的な視点から中立化でない状態というのは、地域間の経済関係よりも、日本も含めて地域外の経済関係が深い場合だと思います。これは、分割され、あるいは植民地支配されていた形態で、それが東西冷戦の中では二つにさかれ、また南北に引きさかれたということです。

そうではなくて、東南アジアの主体性、あるいは地域的連帯感を育てようとする、昔あった地域内の経済関係や、人的文化的関係を再建することが必要になります。ベトナムでは、これが南北の問題でもありません。

朝鮮でもベトナムでも、南北を協力させるのは簡単ではない。といって両方を

外部勢力に結びつけておいたのでは、いつまでたっても政治的な連帯はできず、民族統一の理想も実現しません。そういう観点からアプローチするということですね。

その場合、放射状に東南アジア諸国と日本が結びついたのでは、日本の経済協力が、そういう分裂的な方向を助長することになります。放射的な関係でも、やはり二国間関係、双務的な関係です。だから、ここにも多角的な援助の必要な理由があるんじゃないかと思えます。

インドシナ復興は多角的に、しかも政治色抜きでやるのがオソドックスな考えとされ、二国間援助を排して、場合によっては国際機関を通じた援助だとい

うことなんです。これはすでに障害にぶつかっている。ハノイの立場が、必ずしもそういう方向を望んでないからです。また、アメリカも正面ではパリ会議でも、多角的なもので経済復興をといっていますが、実際には北ベトナムとの経済合同委員会とか二国間の結びつきを、むしろ強めているような感じもします。そのへんに問題があるということなんです。

林 二国間でも、それがたくさんになると、結局中立に近づくんじゃないでしょうか。たとえば、アメリカだけが独占的に援助するのではなく、米・ソから、または日本も加わって多角的に援助をもらう、あるいは経済力が入ってくれば、

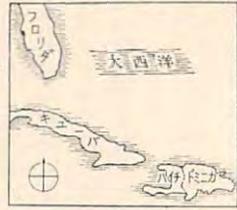
経済力に伴う政治力がお互いに中和されますから、中立に向かうし、援助を受ける国も政治的独立が高まります。三極構造、多極構造の時代になってくると、当然そういう形になります。

いまのすう勢でいくと、平和になって中立化に向かう傾向が出てくるんじゃないかと思えます。ハノイもおそらくそういうことをねらっているんじゃないでしょうか。

斎藤 これまで、あまりにも中ソに依存しすぎていましたから、その意味でアメリカとの関係をつけることは、北ベトナム自身、非常に賢明なやり方をしていると思えますね。

林 では、このへんで……どうもありがとうございます。

# 読者のおちより



★三月号を読んで、私がかつて訪印したころの思い出がよみがえりました。

日本で近年土地開発や道路新設などで遺跡が発見されていますが、それは単なる発見で、すぐ破壊につながっているのが現状です。この開発の波があつた大なインドにも及ぶのではないかと思うと、一口に「開発」とばかり喜べません。日本が急速な経済成長と引き換えに貴重な文化遺跡を失いつつあることを、他山の石としてインドが学んでほしいと思います。

人間の英知が積み重ねてい

た文化の証拠を後世に伝えることは、われわれの義務でしょう。

(埼玉県東松山市松葉町二一三  
一〇 鷲沢義明)

★アマゾン川は南米の赤道付近を流れる世界最大の川で、ヨーロッパ人がこれを見たのは、一五〇〇年スペイン人ピンソンがこの河口に達したのが最初ですが、あまりに広いので、これを川とは思いませんでした。一方ペルーのインカ帝国を滅ぼしたピサロはさらに東方を征服しようとして、弟を長とする探検隊を派遣しました。この隊は途中で動けなくなりしましたが、副隊長が一部を連れて東に進み、アマゾン川を下って河口につきました。彼らは途中で、女人軍と戦ったというので、後にアマゾン伝説に従って、川の名がつけられました。アマゾン伝説というのは、ギリシア神話に出てくる女人国のことです。(編集部)

## 六月号のお知らせ

日中国交正常化に続いて、ベトナム停戦協定が成立し、アジアは大きく変わりつつあります。しかしこれは決してアジアの安定には程遠く、その流動は続くでしょう。そしてそのバックをなすものは米・中・ソのアジア政策だと思います。三大国の政策と日本について、東京新聞の伊藤喜久蔵さん、日本経済新聞の大原進さん、ソ連研究家の原子林二郎さんの三先生に話し合っていました。

自然保護はいまや世界的問題になっており、先般「野生動物保護」に関する国際条約が結ばれました。環境庁の友田安雄先生に、これについて書いていただきます。

伊藤裕子さんは昨年再びサハラを旅行され、古代の壁画など見てこられました。古代サハラ文明の香りを味わわせていただくと思います。

外務省の古田保さんが先般カ

ナダへ行つてこられましたので、そのときの感想など書いていただきます。

## 表紙とカット

表紙はポリビアの首都ラ・パスの市場の女(杉田房子さん提供)

カットは一ページがドミニカの海岸、三十六ページがドミニカとハイチ (神津武夫画)

## 海外サロン 一九七三年五月号

本誌ご希望の方は、左記金額の切手を添えてお申し込み下さい。

- 一部 四五百(送料一円)
  - 半年分 三〇〇円(送料とも)
  - 一年分 六〇〇円(送料とも)
- 発行所 あちらのくらし社

郵便番号 二六一  
東京都新宿区若松町一〇二  
電話東 (二〇二) 八六三二